プロフェッショナル競技者の概念的考察： 経済・技術・倫理の三見地から

高岡 英氣

Hideki Takaoka: A conceptual study of professional athletes from the perspectives of economy, technique, and ethics. Japan J. Phys. Educ. Hlth. Sport Sci.

Abstract: To clarify the conceptual attitude of professional athletes, this paper presents 3 views on occupation using the main analytical framework proposed by Kunio Odaka. The first is the economic perspective. Referring to the content of the Japanese Standard Classification of Occupations, by clearly distinguishing this from other occupations in sports, professional athletes are defined as a profession “participating in competition or games and performing athletic competition.” From the viewpoint of income type and qualifications, we assume that numerous types of professional athletes exist. The second is the perspective of technical skill. Based on the discussions of Mitsuo Taketani and Tomihiko Sato, technical characteristics of athletes are defined as demonstration of their skills in accordance with sports structure as an objective law. Moreover, referring to the organization theory of Ikujiro Nonaka and Hirotaka Takeuchi, we point out that professional athletes are able to transform sports structure in terms of organizational creation. The third perspective of ethics considers the duties that are required of professional athletes. We conclude that their duties in relation to teammates are concerned with the “pursuit of victory through cooperative relationships.” In relation to opponents, such duties are “playing the game through a mutual relationship” and “pursuit of victory in an exclusive relationship.” With regard to spectators, such duties are concerned with “entertainment” and, in terms of the broad relationship to society, “the embodiment of social values.” These 3 aspects are diverse, and dependent on the extent of an athlete’s expertise.

Key words : occupation, expertise, sports structure, organizational creation

キーワード : 職業, 専門性, スポーツ構造, 組織的創造

I 緒言

1. 研究の目的

「プロの競技者」という言葉を耳にするとき、多くの人はプロ野球選手やプロサッカー選手、プロボクサーといった具体的な対象をイメージするのではないだろうか。現代社会において、こうした人々は社会の中で大きな位置を占めている。新聞やテレビニュースにおいて、彼らに関する情報は、今や政治、経済などと並ぶ重要コンテンツである。人々は日々彼らの活躍に一喜一憂し、結果

として彼らに莫大な富をもたらすことになる。

かつて、プロスポーツという対象に対しては、いわゆるアマチュアリズムの立場から批判が繰り返されてきた事実があり、プロの競技者は卑しく、「スポーツの発展にとってマイナスの効果をもたらしたという歴史観、スポーツ観が濃厚であった」（内海，2004，p.14）。だが、1974年にオリンピック憲章から「アマチュア」の表記がなくなったことをはじめとして、スポーツ界において厳格なアマチュアリズムは次第に消えていき、現在では、「高度な技術の開発やその大衆への普及を担う」という意味で、スポーツ文化の発展にとって欠かせ

ない存在」(内海, 2004, p.15)と捉えられるようになってきている。そのような観点から、スポーツ研究の領域において、プロフェッショナル競技者(以下「プロ競技者」と略す)の概念を考察することは有意義であると考えられる。

そこで、本稿の主たる目的・意義は以下のようになる。まず、競技者という個人の位相に焦点化した議論の提示である。後に述べるように、プロスポーツを対象とする既存研究の多くが、主に球団(クラブ)やリーグ機構といった組織の位相に着目している。しかしながら、組織の基礎単位はそもそも個人であり、ましてプロスポーツ組織であれば、プロ競技者という存在を抜きにしてはその活動が成り立たないことは自明である。プロスポーツ組織の分析においても、基礎単位であるプロ競技者の概念の厳密な理解にもとづかなければ、その成果は不十分なものとなりかねないだろう。

2つ目は、競技種目の枠を超えた一般性をもつプロ競技者概念の提示である。対象の分析において、同類の概念との比較は有効な方法であるが、そのためには共通のモノサシが必要となる。われわれがA・Bという2つの物体の大きさや形を比較するためには、例えば三角定規のような共通のモノサシを使わなければならない。この際、定規の目盛りがセンチ、メートルであるか、寸、尺であるかはさほど問題ではない。肝心なことは両者を比較するための共通の基準が存在するかどうかである。こうしたモノサシとして一般的なプロ競技者概念を提示することにより、例えば既存のプロ野球選手やプロサッカー選手と比較して、新興のBリーグの競技者たちに不足する要素は何か、といった考察をする際の基準とすることができるだろう。したがって、本稿でわれわれの提示するプロ競技者の概念は、一部の種目に限定されない一般的な構造をもつものでなければならない。

3つ目は、競技レベルの差異を超えた一般性をもつプロ競技者概念の提示である。われわれが日々目にするプロ競技者は一部のトップレベルのものに限定されがちである。だが、その背後にはより知名度の低い大多数のプロ競技者の存在があ

る。現代スポーツにおいて重要な位置を占めるプロスポーツの発展のためには、こうしたプロ競技者の裾野を広げ文化としての厚みを増すことが重要となるだろう。そうした観点から、トップレベルに限定されない一般的な概念規定を行う必要がある。

最後は、経済的観点に限定されない多様な見地にもとづく概念規定である。プロスポーツに関わる既存の研究の多くは経済的側面に焦点化する傾向がある。だが後述するように、職業という概念には単なる経済活動に止まらない複数の契機が存在する。上述した比較のモノサシとしての有効性を高めるためにも、われわれは複数の観点から概念考察を行う必要がある。

2. 先行研究の検討

さて、言うまでもなく、英語の「プロフェッショナル」「professional」は名詞「プロフェッション」「profession」の形容詞形である。いわゆるプロフェッションの概念分析については、多くの先行研究が挙げられる。中でも、プロフェッション研究の古典とされる Millerson (1964) は、21人の研究者によるプロフェッションの定義を比較検討し、それらの共通要件として次の6点を挙げている。

- (a) プロフェッションは、理論的知識にもとづいた技能を伴う。
- (b) その技能は訓練と教育を必要とする。
- (c) プロフェッショナルは、テストを通過することにより能力を証明しなければならない。
- (d) 倫理規定を遵守することにより高潔さが維持される。
- (e) その活動は公益のために存在する。
- (f) プロフェッションは組織化されている。

同時期にわが国では、石村(1969)が現代社会におけるプロフェッションのあり方を考察しており、その中でプロフェッションの仮の定義として以下のように述べている。

プロフェッションとは、学識(科学または高度の知識)に裏づけられ、それ自身一定の基礎理論をもった特殊な技能を、特殊な教育または

訓練によって習得し、それに基づいて、不特定多数の市民の中から任意に呈示された個々の依頼者の具体的要求に応じて、具体的奉仕活動をおこない、よって社会全体の利益のために尽くす職業である（石村，1969，pp.25-26）。

彼らの議論から、一般的なプロフェッションの共通要件として、高度な技能、教育訓練、倫理性、公益性、組織性といった諸契機が存在が推察される。

この他にも、Millerson の分析を補足する形で、28名の研究者による定義の比較分析を行った竹内（1971）、プロフェッションとそれを取り巻く現代の社会変動との関係を考察し、知識、政治、国際化といった観点から分析を行った中野（1981）らの研究が挙げられる。これらはプロ競技者の概念分析に対し有益な視座を提供するものである。

しかしながら、こうした従来のプロフェッション研究の対象は、医師、弁護士、大学教員といった伝統的な知的専門職であって、本稿で扱うプロ競技者といったものは対象外であった。例えば石村（1969）がプロ野球選手やプロゴルファーを例に挙げながら、議論の対象はそうしたものと異なった次元で捉えられると述べている通りである。

一方で、体育・スポーツ学の領域においては、「プロスポーツ」もしくは“professional sport”をタイトルに冠した研究は、経済学、社会学、法学などの方法論にもとづいたものが存在する。以下ではそのうちの代表的なものに言及する。

Neale（1964）の論文はスポーツ経済学の古典的な研究である。彼は、プロスポーツリーグにおける競技上の競争（チーム同士の対戦など）と経済上の競争（他チームの買収や選手の引抜きなど）を区別し、一般の産業においては禁忌である共謀による経済上の競争の抑制が、却って競技上の競争を促進し、結果としてリーグ全体の収益拡大に繋がる、というプロスポーツビジネスの経済的特性を指摘した。Neale の研究はその後のスポーツ経済学の発展の嚆矢となった重要なものであるが、その分析視座はあくまで経済に限定された

ものである。

川井（2003）は、労働法と独占禁止法の観点から、アメリカ・イギリス・EU・日本の各国におけるプロスポーツ選手の法的地位に関する網羅的な分析を行っており、スポーツ法学の分野におけるプロ競技者研究として特筆すべきものとなっている。内海（2004）は、プロスポーツの役割・意義・歴史・課題などについて、社会学の視座による総体的な把握を試みており、主にアメリカ・イギリス・日本のプロスポーツリーグを対象に、その歴史や経営形態、選手の諸権利、公共性との関係といった様々なテーマについて概説している。両者はともに先行研究として有意義なものであるが、一方で、その研究対象はほぼ、プロ野球やJリーグといったプロスポーツリーグに限定されており、本稿が目的とする競技種目の枠を超えた一般的なプロ競技者概念の提示には至っていない。

また菊（1993）は、Gerth and Mills（1954）の制度概念にもとづき、スポーツおよびプロスポーツを、イデオロギー、ルール、シンボル、テクノロジー、文物、組織の諸構成要素の複合体―「制度」―という枠組みで把握している。それをプロ野球に敷衍化し（プロ野球制度）、制度内的要素の変化と制度外的要因との関連を分析することで、日本プロ野球の成立における社会的な規定要因を明らかにしようとした。プロスポーツを「制度」という概念枠組みで把握しようとした菊の議論は大いに参照すべきものである。だが、その分析は、大学やプロ球団、親会社といった主に組織のレベルに焦点化されており、本稿が対象とする競技者個人の位相とは異なるものである。

先に述べた通り、こうした既存の研究に対して、本稿は競技者個人の位相に焦点化し、多角的な視座から一般性をもったプロ競技者概念の考察を行うものである。

3. 研究の方法

さて、そうした概念考察を行うに際して、改めて「プロフェッショナル」の概念に着目することが重要であろう。上述した Millerson らの研究においても、プロフェッショナルという用語の定義

はなされていた。だが、それらは先行研究の用例をもとに帰納的に定義されたものである。本稿ではそもそもの概念内容を明らかにするために、より原理論的なアプローチを試みるものである。そこで、まずは議論の出発点としてその辞書的定義に立ち返り考察を始めたい。

“Oxford Dictionary of English” (Soanes and Stevenson (eds.), 2003) では、“profession” は他のいくつかの意味とともに以下のように規定されている。

a paid occupation, especially one that involves prolonged training and a formal qualification.

有給の職業、特に長期にわたる訓練と公式の資格を要するもの^{注1)}。

この規定から、それが有給の職業すなわち経済活動の一種であること（職業性）、長期にわたる訓練、公式の資格を要するものであること（専門性）、という2つの契機が見て取れる。そこでまず、そもそも「職業」というものがいかなる概念として理解できるのか、という観点から議論を進めたい。

そのために、以下ではわが国の代表的な職業社会学者である尾高邦雄の職業概念を参照し考察を進めていく。彼は独自の職業社会学を論ずる中で、職業を広義における労働の一形態であると述べて、それは労働に何ものかを加え制限を付した概念であると述べる。

労働はつねに苦痛を伴う力行であるかも知れない。しかし職業はそれ自身が喜びともなり、誇りともなり得るところの労働である。なぜなら、職業は人々が多かれ少なかれその個性を発揮し己を実現する道だからである。また労働は単に衣食の資を得るためによぎなくされた手段であるかも知れない。しかし職業はそれ自身が使命であり任務であり、同時にまたこのかぎり権利でもあるところの労働である。なぜなら、職業は人々が何らかの程度においてその社会的分担を果し、社会に貢献する道だからである(尾高, 1953, p.18) ^{注2)}。

このように、尾高は職業を、単なる生業（衣食の資を得るための経済活動）に止まらない、個性の発揮や社会的分担という複数の側面をもった概念として捉えている^{注3)}。

また、この点について彼は職業の語義も参照して説明している(尾高, 1953, pp.25-28)。「職業」にあたる外国語の多くには、語義の上から2つの意味が含まれるという。一方は「生業」、他方は「天職」もしくは「職分」である。例えば、ドイツ語で職業にあたる言葉は Beruf であるが、これは元来ルターの聖書翻訳にはじまるもので、Beruf には経済活動としての「労働」(Arbeit) と神から与えられた「召命」(Berufung) という二様の意味が訳し入れられたという。したがって、Beruf の元来の意味は労働プラス召命に他ならないのである。

このように、尾高は職業を単なる経済活動に止まらない複合的な概念として捉えており、これはプロ競技者概念を複数の観点から捉えようとする本稿の目的に合致するものである。

さて、上述したような職業概念の理解にもとづき、彼はそれを以下の3側面から論じている。

- ①生計の維持および営利獲得のための継続的な人間活動
- ②人間がその個性を発揮して他に寄与するところの活動
- ③人間としてつくすべき本分あるいは使命

そして、一般概念としての職業とは、「生計の維持」、「個性の発揮」および「役割の実現」の3面からなる人間活動と規定できるとした。尾高は、この3面に対応する従来の職業研究における3つの見地を上げている(尾高, 1953, pp.55-56)。

1つ目は経済的見地である。職業は、生計維持および営利獲得のための継続的な活動という側面をもっている。すなわち、各人はその個性を発揮した引換えとして、金銭収入を得ることが可能となる。こうした職業の「生計の維持」という側面を強調する見地を、職業への経済的見地という。

2つ目は技術的見地である。職業には、人間がその個性を発揮して他に寄与するところの活動と

いう側面がある。そして、この場合の個性とは、各々の職業に特有の技術体系に適合したものが前提とされる。職業の「個性の発揮」という側面を強調する見地を、職業への技術的見地という。

3つ目は倫理的見地である。また職業は、各人が担う社会的役割であるという意味で、社会と個人との結節点として存在する。その時職業は、単なる営利の手段ではなく、各人が他者との社会的共同の生活において、一定の仕方ですれを果たすことを要求される社会的責務、という側面をもつ。この職業における「役割の実現」という側面を強調する見地を、職業への倫理的見地という。

本稿では、これら3つの見地からプロ競技者の概念を分析していく。まず、経済的見地から職業調査の分類を参照し、スポーツに関わる他の職業との峻別によって職業としての「プロフェッショナル競技者」を明確にしていく。次に、技術的見地に則り、まず技術概念の検討を行った後、プロ競技者の技術的特性を明らかにしていく。最後に、倫理的見地から、プロ競技者が果たすべき「役割」がいかなるものであるのかを考察する。

さらに、以下の議論では、profession の概念に内在する「専門性」の契機にも着目する。専門性の契機は、3つの見地による一連の考察を貫く議論の横串となり、特に本稿の結論部においてプロ競技者概念の重層的な構造を明らかにする際の重要な説明原理となるだろう。

II プロフェッショナル競技者 への経済的見地

本節では、上述した職業に対する3見地の1つである経済的見地からプロ競技者の概念を考察する。まず、この経済的見地がどのようなものなのか、より詳しく説明しておこう。尾高(1953)は、「職業とは何か」という問いに対する第1の回答として、以下のように述べている。

その第一の答えによれば、職業とは衣食の資を得るための継続的な人間活動である。それは何よりもまず生計維持の手段である。だからそ

れは「生業」と呼ばれるにふさわしい。ただ今日のこのような貨幣経済の社会では、生計を立てるためには一定の金銭収入を得ることが必要である。だからそれは広義において「営利的」である。この意味では生計のための職業は、同時に営利のための職業でもあるであろう(尾高, 1953, p.11)。

そして、この職業の「生計維持のための人間活動」という側面を強調する見地を、職業への「経済的見地」としている。さらに、この経済的見地に立つ職業研究の最も代表的なものは、職業統計調査であるという。それは、「統計学あるいは統計的方法による職業研究であって、一口にいえば、一社会の人口がどのような職業別構成を有するかを数量的に把握しようとするものである」(尾高, 1953, pp.56-57)。わが国では、大正9年以来ほぼ5年ごとに国勢調査が行われている。特に戦後は毎回、男女、年齢、配偶関係などの人口の基本的属性に加え、産業、職業などの経済的属性に関する調査も行われるようになっており、これが上述の職業統計調査に当たるものと考えてよい。

さて、この職業統計調査の中でわれわれの関心を引くのが、そこで用いられている職業分類である。国勢調査において採用されている「日本標準職業分類」(以下「JSCO」と略す)は、わが国の最も一般的な職業分類と言われるものである。JSCOでは、「個人が行う仕事で、報酬が伴うか又は報酬を目的とするもの」(総務省, 2009, p.43)と職業を定義しており、これはまさに職業の経済的側面と符合するものである。この職業分類を適用する単位は個人とされており、以下の諸点を基準として分類項目が設定されている。

- (1) 仕事の遂行に必要とされる知識又は技能
- (2) 事務所又はその他の組織の中で果たす役割
- (3) 生産される財・サービスの種類
- (4) 使用する道具、機械器具又は設備の種類
- (5) 仕事に従事する場所及び環境
- (6) 仕事に必要とされる資格又は免許の種類

(総務省, 2009, p.44)

分類は、大分類、中分類、小分類の3段階になっており、その構成は、大分類12、中分類74、小分類329となっている。この中からプロ競技者に関連があると思われる項目として、中分類項目「24 その他の専門的職業従事者」に含まれる小分類項目「245 職業スポーツ従事者」を挙げることができる。内容は「野球・相撲・ボクシング・レスリングなどの競技又は試合に参加し、運動競技を行うもの、及び監督・審判員など競技に直接関連する仕事に従事するもの」（総務省、2009、p.125）とされる。具体例として「プロボクサー」、「プロ野球選手」、「プロサッカー選手」といった競技者に加え、「プロ野球監督」、「レフェリー」などが「競技に直接関連する仕事に従事するもの」として挙げられている。

一方、JSCOにはスポーツに関わるその他多くの職業が含まれている。「その他の専門的職業従事者」には、「244 個人教師」という小分類項目があり、その内容は「茶道・生花・書道・囲碁・音楽・舞踊・スポーツなどの個人教授、及び学校教育の補習指導に従事するもの」というものであり、「茶道個人教授」や「ピアノ個人教師」といった職業と並んで、「柔道師範」、「ゴルフレッスンプロ」、「スキー・インストラクター」などが含まれる。また、大分類項目「専門的・技術的職業従事者」の中には、中分類項目として「19 教員」が含まれている。これは幼稚園から大学までの各学校・専修学校・各種学校・その他の教育施設において教育・養護に従事する職業とされ、いわゆる体育科の教員もこの中に含まれることになる。スポーツを教授する個人教師や体育科の教員は、いわば「教育」という形でスポーツに関わる専門職である。

また、「専門的・技術的職業従事者」の中には、「121 医師」や「152 あん摩マッサージ指圧師、はり師、きゅう師、柔道整復師」といった小分類項目が含まれている。この中には当然、スポーツ傷害専門の医師や整復師も含まれることになる。これらは、医療という形でスポーツに関わる専門職であると言えよう。また、小分類項目「211

著述家」や「212 記者、編集者」の中には、具体例として「スポーツ評論家」、「スポーツライター」が挙げられている。これなどは評論や取材という形でスポーツに関わる専門職と言えるだろう。

このように、生計維持の手段としてスポーツに関わる職業は数多く存在し、その中には専門性を要求される「プロフェッショナル」と呼ぶべきものが多く含まれる。しかしながら、これらの職業は「スポーツに関わる」という意味において共通性を持っているものの、そこにおいて必要とされる技能に関してはそれぞれ異なっている。例えば、体育教師には教育力、スポーツ傷害専門の医師には医療の技能、スポーツライターには取材力、といった具合である。対して、われわれのプロ競技者に求められるのはいわゆる競技力というものである。次節において議論するように、技術・技能は当該の職業を特徴づける重要な要素である。そのような理由によって、われわれは考察の対象を、「競技又は試合に参加し、運動競技を行う」という形でスポーツに関わる職業としてのプロ競技者に絞っているのである。

さて、尾高の言うように、職業は「一定の金銭収入を得る」ための営為である。では、プロ競技者という職業においては一般にどのような収入形態があるのだろうか。

表1は米国の経済誌 *Forbes* が毎年発表しているアスリート長者番付の上位10名をまとめたものである。ここから分かるように、一般にプロ競技者が得るのはサラリーあるいは賞金、すなわち競技からの収入とエンドースメント収入の2種類である^{注4)}。

ところで、表にあるような金額を目にして、このような莫大な収入を得られるのは、競技者全体のごく一部ではないか、という疑問が生じるのは当然のことだろう。特に、エンドースメント収入に関しては、知名度の高い一握りの競技者のみが得られるものと考えられる。それどころか、「生計のための一定の金銭収入の確保」ということすら、プロ競技者の必要条件として素朴に考えることはできない。というのも、彼らの中には、競技

表1 高額収入アスリート上位10名 (Forbes, 2017 より作成)

順位	名前	競技	年収合計 (万ドル)	サラリー / 賞金 (万ドル)	エンドース メント(万ドル)
1	クリスティアーノ・ロナウド	サッカー	9,300	5,800	3,500
2	レブロン・ジェームズ	バスケットボール	8,620	3,120	5,500
3	リオネル・メッシ	サッカー	8,000	5,300	2,700
4	ロジャー・フェデラー	テニス	6,400	600	5,800
5	ケビン・デュラント	バスケットボール	6,060	2,660	3,400
6	アンドリュー・ラック	アメリカンフットボール	5,000	4,700	300
6	ローリー・マキロイ	ゴルフ	5,000	1,600	3,400
8	ステフィン・カリー	バスケットボール	4,730	1,230	3,500
9	ジェームズ・ハーデン	バスケットボール	4,660	2,660	2,000
10	ルイス・ハミルトン	オートレーシング	4,600	3,800	800

からの収入による生計の維持が成り立たない人々が存在するからである。

例えば、プロボクサーの中で、ファイトマネーのみで生計を維持できるのはほんの一握りであると言われる。国内に目を向けるならば、いわゆる日本ランカークラスで1試合のファイトマネーが30万—100万円程度。それ以外のキャリアの浅い選手の中には数万円程度の者も多く存在し、主たる収入はアルバイトなどの競技外収入というケースが大半であると言われる (Career Garden, online)。

こうした低収入にも関わらず、彼らが「プロ」と呼ばれる根拠として、その専門的能力の担保となる資格・登録・契約の存在を挙げることができる。例えば、日本国内でプロボクサーになるためには、統括団体である日本ボクシングコミッション (JBC) が認定するプロライセンスを取得する必要がある。プロゴルフにおいては、日本プロゴルフ協会 (PGA) が認定する「トーナメントプレイヤー (TP) 資格」が存在する。プロテニスには明確な資格はないものの、統括団体である日本テニス協会が承認する競技会出場により賞金・懸賞金を得るためには、同協会の規定に則り「プロフェッショナル登録」をする必要がある。こうした資格取得もしくは登録のためには、いずれも認定団体が定める試験の合格もしくは一定以上の競技実績が要件となる^{注5)}。

サッカーのJリーグでは、選手はクラブとの

間に日本サッカー協会 (JFA) が認定するプロ契約 A・B・C 契約のいずれかを締結しなければならない。プロ野球においても、選手は日本野球機構 (NPB) が定める統一契約書に署名しなければならない^{注6)}。こうした競技者たちの技術水準は、国内における支配的なプロ組織との契約を勝ち取ることにより、いわば間接的に担保されているといえることができるだろう。これらは、いわば契約にもとづく実質的なプロ資格であるといつてよい (傍点は筆者による)^{注7)}。

いずれにせよ、ここにおいて競技者のプロフェッショナル性の根拠となるのは、その専門的能力である。一方で、彼らの多くが「生計のための一定の金銭収入の確保」という上述したプロの要件を満たしていないようにも思われる。この点については、本稿の最後で改めて議論したい。

III プロフェッショナル競技者 への技術的見地

1. 技術とスポーツ構造

本節では、職業への技術的見地からプロ競技者の概念を考察していく。

まず、職業への技術的見地について簡単に説明しよう。尾高は「職業とは何か」という問に対する第1の解答として上に挙げた「生計維持の手段」を与えた上で、さらに以下のように述べている。

人々は職業を通じてもろもろの文化を産出し、これによって互に寄与し合う。しかるにこのことは、各人がそのもっとも得意とするところを発揮することによってのみ可能である。肝心なことは個性の発揮ということである。そこでこの見解によれば、職業とは人間がその個性を発揮して他に寄与するところの活動であるということになる（尾高，1953，p.12）。

職業の主要素としてこの「個性の発揮」という側面を強調する見地を、先に見たように職業に対する「技術の見地」という。尾高はさらに、技術の見地に立って職業を取り扱う学問領域として職業心理学を挙げている。彼によれば、職業心理学の課題は、各職業における作業の技術的特質と、各個人が具える性能（個性）の技術的特質を、それぞれ「職業分析」、「性能検査」といった方法によって明らかにし、いわば「適材適職」に寄与することで職業活動の能率増進をはかることにある。したがって、職業に対する技術の見地とは、まずもって職業と個人との技術的適合関係に着目する見地であると言える。

ここで、技術という概念についてより深く考察するために、武谷三男の技術論を参照したい。わが国を代表する理論物理学者であった武谷は、終戦直後の時期、当時支配的であった、技術を労働手段の体系として捉えるいわゆる「手段体系説」に対抗し、独自の技術論を展開した。彼は人間の実践、特に生産的実践の原理として技術を捉え、さらに従来議論では混同されがちであった「技術」と「技能」の峻別を強調した。

…技能と技術の分離について申しますならば、日本において特にこの点が重要であります。技術は客観的なものであるのに対し、技能は主観的心理的個人的なものであり、熟練によって獲得されるものであります。技術はこれに反して客観的であるゆえに、組織的社会的なものであり、知識の形によって個人から個人へと伝承という事が可能なのであります。すなわち技術は社会の進展に伴い伝承により次第に

豊富化されていく事になります（武谷，1968，p.137）。

すなわち、技能が個人の熟練によって培われる個別的な能力であるのに対し、技術は組織的社会的に培われた客観的なものであるというのである。

さらに、武谷は「人間の実践、特に生産的実践は客観的法則性において行なわれ、客観的な法則を無視せる人間の実践は存在」しないという（武谷，1968，p.137）。たとえば、農業においては季節や気候、建築業においては材料となる物質の特性などの自然的法則性を無視して生産的実践は成り立たないであろう。また、医療の領域には歴史的に培われた医学の体系が存在するし、法務の領域においては法理論の体系が存在する。これらはいわば人為的な客観的法則性である。人間の実践はこうした客観的法則性を欠いては成立し得ないのである。

彼は続けて、技術とはこうした客観的法則性そのものではなく、「人間実践（生産的実践）における客観的法則性の意識的適用である」と主張する（武谷，1968，p.139）。単に法則性の適用ということでは一般動物の行動でも法則性の適用であるが、それは本能に従った無意識的なものに過ぎない。技術的実践の特徴は、客観的法則性を意識的に適用することにあると武谷は主張する。

人間においても、個人的な技能の発揮により、生産的実践において一定の成果を上げることができるかも知れない。例えば、腰痛の人に対して、医学の専門知を持ち合わせない一般人が、「指先の器用さ」という個人的な技能によってマッサージを行い、治癒させることはあり得るだろう。だが、当然ながらそこには偶然的な要因が強く働いており、したがってその成功率は、客観的法則性の意識的適用としての医療行為、例えば、同様に指先が器用な医師が、医療の専門知にもとづきマッサージを行うことによるものには到底及ばないだろう。このように、人間は意識的に客観的法則性に則って自らの技能を発揮することで、はるかに大きな生産性を上げることが可能になるのである。

る。

以上の点を踏まえ、武谷における「技術」とは、「人間が意識的に客観的法則性に則って自らの技能を発揮する」という事態そのものを意味するものであると言えよう^{注8)}。この武谷の技術論を、上述の尾高の議論に当てはめてみよう。武谷の言う「技能」とは個人的主観的能力であるから、これは尾高の言う「個性」に相当すると考えてよいだろう。一方、医療における医学の体系に相当する「客観的法則性」は、尾高の言う「職業の技術的特質」を規定する重要な要素であろう。たとえば、外科医という職業の技術的特質は「複雑な外科手術行うこと」などであろうが、これは客観的法則性としての医学体系を前提にしなければ説明しようのないことである。

さて、ここまでの議論とプロ競技者の概念考察を結び付けてみよう。職業の技術的特質を規定する重要な要素として、武谷の言う「客観的法則性」が位置づけられることは上で述べた通りである。

では、われわれのプロ競技者が関わるスポーツという対象において、その客観的法則性とはいかなるものだろうか。この点を考察するために、佐藤（1992）の議論を参照したい。佐藤は、スポーツを実体的な文化概念としてとらえ、その概念構造の定式化を試みている。

通常、われわれは、われわれの目の前に展開している運動現象をスポーツそのものであると思いをしている。しかし、スポーツが文化だとするなら、われわれからは独立した独自の「構成体」として存在している、と考えなければならないことになる。…われわれはここで、この文化的構成体としてのスポーツに対し、「スポーツ構造」という名称を与えることで、目に見える運動現象としてのスポーツ、すなわち「スポーツ現象」との概念上の区別を明確にしておきたい（佐藤，1992，p.8）。

ここで着目すべき点は、彼が「スポーツ現象」と「スポーツ構造」とを明確に区別していることだ。彼の言う「スポーツ現象」とは、われわれが

スポーツ、例えばサッカーの試合を観る際に現前する、キック、ドリブル、ヘディングといった具体的な運動現象の位相を指し示す言葉である。こうしたスポーツ現象は、「実に多種多様、千差万別、同一の事象は二度と起こらない『一回性』の世界である」（佐藤，1992，p.8）。それに対し、「スポーツ構造」とはそうしたスポーツ現象をそれとして生起させる人為的に構成されたシステムである。それは、ちょうど学問が個々の人間からは独立した「知識体系」を構成し、芸術が個々の人間から独立した「作品体系」を構成しているのと類比的に捉えられる。そして、移ろい行くスポーツ現象ではなく、スポーツ構造を考察の対象にすることで、われわれは現象を生起させる根拠自体を分析することが可能になるという。

こうしたスポーツ構造は、スポーツに関わる人間の諸能力の形式（Form）である知的契機、感性的契機、身体的契機が相互規定的に関連し合う複合的構成体として把握できるという。すなわち、知的契機とは、ルールや戦略・戦術、スポーツ器具、トレーニング法といった、スポーツ文化に固有の知的営為の所産であり、感性的契機とは、スポーツマン・シップや武士道といった価値観であり、身体的契機とは、「背面跳び」、「ベリー・ロール」といった、客観化された身体技法としての「運動形式」である。これらの3契機が相互規定的に関係し合うことでスポーツ構造を構成しているのである。佐藤はこうしたスポーツ構造の概念と自然科学における「法則」の概念を類比的に捉えている。

われわれが目にするスポーツ現象は、実に多種多様、千差万別、同一の事象は二度と起こらない「一回性」の世界であるといえるが、しかし、それはあくまでも「スポーツ現象」という位相においてのことであって、文化的構成体としての「スポーツ構造」に考察の目を向けるなら、事情は全く異なってくる。もし、われわれが自覚的に「スポーツ構造」を研究対象として設定するなら、移ろい行く「現象界」ではなく、その現象を引き起す根拠自体を問うことになる

ので、丁度、自然科学が多様な自然現象の根拠として一定の「法則」を探究するのと同様の性格を有することになってくるのである（佐藤，1992，p.8）。

「自然現象」の根拠としての「法則」とアナログ的な「スポーツ現象」の根拠としての「スポーツ構造」。これはまさに、武谷の言う「客観的法則性」に類似する概念であろう^{注9)}。

すると、以下のように考えることができる。スポーツを職業とするプロ競技者は、決して自分の走力や跳躍力といった「技能」のみでそれを実践することはない。彼らにとっては、当該スポーツ独自の「運動形式」，「ルール」，「戦術」，「価値観」といった諸々の体系（こうした諸体系は全てスポーツ構造に含まれるものである）に意識的に則って行為することが重要となる。これはまさに上述した「人間実践における客観的法則性の意識的適用」であり，すなわちスポーツ実践において適用される「客観的法則性」は他ならぬ「スポーツ構造」ということになるのである。こうした観点からわれわれは，プロ競技者という職業における技術的側面を，「客観的法則性としてのスポーツ構造に意識的に則り競技者が自身の技能を発揮すること」，と表現することができるのである。

2. 組織とイノベーション

上述の通り，プロ競技者の技術的側面はスポーツ構造に意識的に則った技能の発揮と表現することができる。しかしながら，こうした技術の捉え方は何もプロに限られたものではなく，学生や社会人といったアマチュアの競技者にも当てはまるものである。では，プロ競技者そのものを特徴づける技術の在り様をどのように理解すればよいのか。

この問題について，以下では現代企業組織におけるイノベーション創出のメカニズムを明らかにした野中・竹内（1996）の議論をもとに考察していこう。野中らによれば，組織内部からの知識や情報の創造すなわちイノベーションの本質には，暗黙知と形式知の相互作用がある。彼らは，

Polanyi（1958, 1966）の議論を下敷きに，知識を「暗黙知」と「形式知」に分けて捉える（野中・竹内，1996，p.88）。すなわち，暗黙知は，特定状況に関する個人的な知識であり，形式化したり他人に伝えたりするのが難しい。一方，形式知は，形式的・論理的な言語によって伝達できる知識である。この暗黙知と形式知は完全に別々のものではなく，相互補完的なものである。「人間の創造的活動において，両者は相互に作用し合い，互いに成り変わる」（野中・竹内，1996，p.90）のであり，知識創造は暗黙知と形式知の社会的相互作用を通じて拡大される。

こうした前提のもとづき，野中らは組織における知識変換の4つのモードを提示する。（1）個人の暗黙知からグループの暗黙知を創造する「共同化」，（2）暗黙知から形式知を創造する「表出化」，（3）個別の形式知から体系的な形式知を創造する「連結化」，（4）形式知から暗黙知を創造する「内面化」である。図1はこれらのモードを図式化したものである。

このうち，野中らは特に既存の研究蓄積が十分でない「表出化」のモードに関して，重点的に考察を行っている。表出化は，「暗黙知がメタファー，アナロジー，コンセプト，仮説，モデルなどの形をとりながらしだいに形式知として明示的になっていく」（野中・竹内，1996，p.95）プロセスとして捉えられる。ここでは，特にこのうちの「アナロジー」と「コンセプト」に注目し，野中らが挙げた事例をもとに解説をしていこう。

野中らは「アナロジー」について，「二つの異

図1 4つの知識変換モード（野中・竹内，1996，p.93）

なったものの間の『共通点』にとくに注目することで、未知の部分を減らす」ものであり、その連想は「論理的思考によって行われ、二つのものの間の構造的・機能的類似に焦点を当てることで、差異までも明らかになる」と述べる(野中・竹内, 1996, pp.99-100)。この説明として彼らが具体例の1つに挙げるのが、1980年代の松下電器による家庭用自動パン焼き機の開発過程である。この時の開発チームが直面した課題は、熟練パン職人がもつ本来的に暗黙知であるパン生地を練るプロセスをどう機械に乗せるかであった。そこでチームメンバーの1人が、当時地域で一番おいしいとされた大阪コクサイホテルのチーフ・ベーカーに弟子入りし、その技能の観察を行った。その結果、チーフ・ベーカーがパン生地をただ引っ張るだけでなく「ひねり」も加えており、これがおいしいパンの秘訣であることに気が付いたのである。こうして、いわばチーフ・ベーカーの暗黙知を観察、模倣、訓練によって共同化し、それをもとに良質な自動焼き機の開発に成功したのである。

この開発過程は、良質な自動焼き機を製造するための形式知の獲得のプロセスであり、チーフ・ベーカーの存在は、その成功の鍵となる重要なアナロジーであったと言える。野中らは、表出化の過程は、「暗黙知を明確なコンセプトに表すプロセスである」(野中・竹内, 1996, p.95)とも述べている。開発チームはチーフ・ベーカーの暗黙知を「ひねり伸ばし」というコンセプトに昇華させ、形式知の形成に繋げていったのである。

さて、ここまでの野中らの議論を競技者の技術論に引き寄せるならば、主観的・経験的な次元に依拠する暗黙知は競技者の個別的な能力である「技能」に、客観的・理性的な次元に依拠する形式知は「客観的法則性」たる「スポーツ構造」に、それぞれ当てはめることができる。

先にも述べた通り、競技者の技術を「客観的法則性としてのスポーツ構造に意識的に則り競技者が自身の技能を発揮すること」と規定するだけであれば、それはアマチュア競技者にもあてはまる。アマチュア競技者とプロ競技者をまさに峻別するのは、プロ競技者の場合、組織的なコミュニ

ケーションを通して、競技者の技能がコンセプト化され、スポーツ構造自体の変容をもたらすという点である。以下では、このことを具体例で示していく。

現代サッカーを代表する指導者の1人であるジョゼップ・グアルディオラ(Josep Guardiola i Sala, 1971-) (通称“ペップ”)は、2008年から2012年にかけて、世界的なビッグクラブであるFCバルセロナの監督を務め、国内リーグ優勝3回、欧州のナンバー1クラブを決めるUEFAチャンピオンズリーグに2回優勝するなど、輝かしい成績をおさめた。その成功の要因は数多く考えられるが、そのうちの1つに、アルゼンチン代表のストライカー、リオネル・メッシ(Lionel Andrés Messi, 1987-)の活躍が挙げられる。2005年にバルセロナでデビューしたメッシは、以来ストライカーとして目覚ましい活躍を残し、ヨーロッパの年間最優秀選手賞に当たるバロンドールを5回獲得するなど、まさに現代サッカーを代表する選手となった。そのメッシの才能を最大限に発揮するためにグアルディオラが彼に与えた役割が、「ファルソ9(falso 9)」であった。

ファルソ9とはスペイン語で「偽りの9番」を意味する。元来サッカーではセンターフォワードが背番号9を付けることが通例である。ファルソ9とは、9番つまりセンターフォワードのポジションでスタートし、そこからボールを求めて中盤に下りてきてプレーする選手のことだ。本来のストライカーのゾーンを空けるいわば「決められたゾーンを持たないポジション」として機能するため、対戦相手のディフェンスはどう対処していいかわからず混乱することになる。

サッカーの歴史を遡れば、こうした役割を担った選手は数多存在した。アドルフ・ペデルネラ^{注10)}、ヒデクチ・ナンドル^{注11)}、アルフレッド・ディ・ステファノ^{注12)}、ミカエル・ラウドルップ^{注13)}、フランチェスコ・トッティ^{注14)}といった選手たちである。グアルディオラの功績は、こうした選手たちのプレーの分析から、ファルソ9というポジションを再構築した点にある。後にグアルディオラがドイツの名門クラブ、バイエルン・ミ

ユンヘンに移籍した最初の 2013-2014 シーズンを密着取材したパラルナウは、この点について以下のように述べている。

ペップは彼らを分解してエッセンスを取り出し、メッシのために再構築した。これまでの一般的な形は、ゴール前のセンターに FW を固定してシュートする、というもの。しかしペップは多くの選手がスペースの取り合いをしている攻撃の中枢をわざと空白地帯にした。これは、ファルソ 9 がポジションや選手ではなく『コンセプト (concepto)』に変わった瞬間でもあった (パラルナウ, 2015, p.76)。

これを先の野中らの議論に引き付けるならば、グアルディオラが行ったのは、ペデルネラをはじめとするかつて名選手たちをアナロジーとして、彼らの技能に共通する特性を、「ファルソ 9」というコンセプトにまで昇華させる作業であった、と言えるだろう。ファルソ 9 がコンセプトとなることで、個人のレベルを超えた一般的な応用が可能となる。事実、バイエルンに移籍した後に、彼は FW のフランク・リベリー^{注15)}にファルソ 9 の役割を与えたのである。

さて、この事例において最も注目すべき部分は、グアルディオラという指導者が、メッシや過去の名選手といった様々な競技者との関わりの中でファルソ 9 のコンセプト化に成功したという事実である。これはいわば、指導者と競技者との間の広い意味でのコミュニケーションを通じて、1 つのコンセプトが確立したということである。

こうした事例に限らず、トップレベルの競技スポーツにおいて、個人の技能がコンセプトにまで昇華される営みは珍しいことではない。上述の技術論に引き付けるならば、これは競技者が依拠する客観的法則性としてのスポーツ構造の変容を意味するものである。技能の問題に限らず、様々な個々のスポーツ実践をきっかけに、新たな戦術やトレーニング理論の発明、あるいはルール改正といったスポーツ構造の変容が起り得る。

重要なことは、こうした変容が、競技者・指導

者を含む広い意味での組織的なコミュニケーションによりもたらされるということである。この事実は、先の野中らの議論における、組織内部からの知識や情報の創造としてのイノベーションの概念に通じるものである。

こうした、イノベーションとしてのスポーツ構造の変容は、各々の競技の発展にとって重要なことである。中でも、高次元の競技レベルが追求されるプロスポーツの現場においては、常に新たなイノベーションが求められるのであり、それを可能にするための確固とした組織体制が重要となるのである。例えば、上述のコンセプト化の過程においても、戦術分析を担う多数の有能なコーチング・スタッフの存在が不可欠になる。こうした組織体制づくりのためには、一定程度の経済的基盤が必要となるだろう。人気のある一部のアマチュアスポーツを例外とするならば、そのような経済的基盤はプロスポーツにおいてはじめて可能になると言える。

ここまでの議論を踏まえ、われわれはプロ競技者そのものを特徴づける技術の在り様について以下のように述べるができる。すなわち、プロ競技者のスポーツ実践は、彼らを取り巻く確固とした組織体制を前提に、彼らが依拠する客観的法則性としてのスポーツ構造の変容を可能にする。彼らの技術は、それ自体が自らに変容をもたらすのである。

さて、このような主張に対しては、そうしたイノベーションの創出はプロスポーツの中でも極めてトップレベルの限られた領域においてのみ生じ得ることではないか、という反論も容易に想像できる。この点については本稿の最後に改めて論じることとする。

IV プロフェッショナル競技者 への倫理的見地

1. 役割の実現としての職業

前節では、職業に対する技術的見地からプロ競技者の概念を考察した。本節では、倫理的見地からプロ競技者という職業がどのように規定できる

かを考察したい。まず、職業の倫理的見地について簡単に説明しよう。尾高は「職業とは何か」という問に対する解答として上に挙げた「生計維持の手段」、「個性の発揮」の2つを与えた上で、さらに以下のように述べている。

しかるに、第三の答えはいう。職業とはつまり「職分」のことである。それは人間としてつくすべき本分あるいは使命である。各人はそれぞれ一定の社会的分担をもっている。この分担を果たすことは各人に課せられた任務である。そしてこの任務の遂行が職業にほかならない。人間の社会生活は各人がその役割を果たし、これを通じて互に協力することによってのみ可能である。すなわち相互協力、およびこのための役割の実現ということが職業の核心である。かくして第三の見解によれば、職業をして職業たらしめるものは役割の実現であるということになる（尾高、1953、p.12）。

尾高はさらに、「一社会の成員であるかぎり各人にはそれぞれその役割があり分担がある。かかる役割あるいは分担が遂行されることによってのみ人間の社会生活は可能となるであろう」（尾高、1953、p.29）という。この職業の「役割の実現」という側面を強調する見地を職業に対する倫理的見地という。

尾高によれば従来「職業社会学」と銘打たれた職業研究は、ほとんどがこの倫理的見地に立ったいわば「職業道徳論」というべきものであった。この職業道徳論においては職業の「かくあるべき姿」やそこにおける各人の「果たすべき責務」といった、いわゆる当為論が議論の主題となる。

これに対し、尾高は自身の職業社会学の立場を区別し、その課題は単に職業道徳を論じることには止まるものではないという。彼は「人間共同生活の理法」を明らかにするという社会学固有の課題を、「人間の社会的分担」という職業の性質と結びつけ「職業の社会学的概念」を明らかにしようとした。そして、職業はたとえば「人間が他の多くの人々と1つの共同生活もしくは協力事業に参

加し、そしてそれを彼らとともに実現していくための不可欠の、また普遍的な通路」のようなものであるとした。このような意味で、職業は「人間共同生活の要因もしくは構成契機」であり、それが「職業の社会学的概念」であるという（尾高、1953、pp.147-148）。そして、職業が人間の共同生活の要因もしくは構成契機であるということには、2つの意味の区別があるという。

（一）まず、職業は、それが互いに異なり、したがって人々が異なる職業を通して有無相通ずる関係に立つことにおいて、共同生活の要因となり得る。言い換えれば、それは職業分化あるいは社会的意味の分業の形において、人間を互いに結びつけるのである（尾高、1953、p.148）。

職業分化が進んだ社会においては、各人はそれぞれ異なった職業を営んでいるが、交換経済が発達するにつれて、かえって職業相互間の依存関係は進展する。このような社会において、人々はそれぞれ異なる職業を通じて互いに協力しているのである。このように、「職業はまずその相補性において、共同生活の構成的契機となるといい得る」（尾高、1953、p.149）のである。

（二）次に職業は、他面ではその共通性あるいは類似性においても、共同生活の要因となり得る。上の場合には職業が互に異なる場合であったが、この場合は職業が互に等しいか、あるいは類似する場合である。つまり人々はその職業を互に等しくするか、あるいは類似の職業につくことによって、やはり1つの共同生活を形成し、もしくは1つの協力事業に参加し得るのである（尾高、1953、pp.149-150）。

尾高はこの職業の類似性ということ、工場の仕事を例に挙げて説明する。

一つの工場を例にとっても、そこで行われている生産という協力作業には、いくつかの仕事

や機能の分担があり、同時にこの分担された仕事や機能にたずさわる同じ職場の人々の間には、より小範囲ではあるが、しかし多くの場合一層緊密な一一つの協力作業が行われている。同じことは、一つの地域社会についても、さらに一つの国民社会全体についても、いうことができる。そしてこのようなより広い場面における仕事の分担、もしくはかく分担された仕事が、職業にほかならない（尾高、1953, p.147）。

この工場の例からも分かるように、こうした仕事の分担は「同時にこの分担された仕事を等しくする一群の人々」を生み出し、彼らは「仕事の類似性の故に結束し、そこに彼ら独自の共同関係もしくは協力関係を形成する」（尾高、1953, p.150）のである。このように、職業はその類似性という契機によっても共同生活の要因となり得るのである。

このように、尾高の議論においては、「職業を特に社会的分担として把握するということは、その共同生活の要因としての意義を、一面ではその相補性にもとづき、他面ではその類似性にもとづいて認めることにほかならない」（尾高、1953, p.151）ということが強調されるのである。

そして、人々の職業を通じた社会的分担は、職場というミクロな範囲に止まらず、それを取り巻くより広い範囲の共同性の構成契機となる。例えば、従業員同士の協力関係によって構成されたある企業の共同性は、当該地域におけるその他の企業との相補関係を通じその地域社会の共同性に繋がる。さらにその地域社会の共同性は、他の地域社会との相補関係を通じ、都市や地方、最終的には国や国際社会といった、より広大な範囲の社会的共同性に繋がるのである。すなわち、各職業における人々の社会的分担・役割の実現は、同心円状に広がるより広範囲な社会的共同性の構成に繋がるといえることである。

ここまでの尾高の議論に即して考えるならば、プロ競技者という職業の倫理的側面を明らかにするということは、すなわちプロ競技者たちが果た

すべき社会的分担・役割がどのようなものであり、さらにはそれがどのような形でより広範囲の社会的共同性の構成に繋がるのかを明らかにするということになる。自らの社会的分担・役割に対する競技者たちの理解のあり方は、彼らの価値合理的な行為の動機に関わるものであり、そうした社会的共同性が構築される上での重要な契機となるだろう。

2. ゲームの成立と勝利の追求

前節では、役割の実現という側面から職業概念を考察した。ところで、職業である以上は、上で述べたような職場における協力関係は単なる自己目的的なものではないはずである。自動車工場を例に挙げるならば、その職場における協力関係は「自動車の製造」という目的に方向づけられるものであろう。では、われわれのプロ競技者という職業においては、その目的はどのようなものとして理解できるだろうか。

この問題について、まず川谷（2005）のスポーツ倫理に関する議論を入りに考察していきたい。川谷は、従来のスポーツ倫理学の議論を、「正々堂々と戦え」、「卑怯なやり方はよくない」といったスポーツ外在的な道徳規範の天下り的なスポーツへの応用であると批判し、真のスポーツ倫理は、その本質への洞察を必然的に要請すると主張した。そして、スポーツの本質は身体を用いた競争であるとし、勝利の追求というスポーツの内在的目的こそが競技者のエトスである、という結論を導き出した。こうした観点からは、卑怯な行為と非難されることもある「野球における主力打者の敬遠」といったような行為も許容される。ここでは、この「勝利の追求」というスポーツの内在的目的を、プロ競技者という職業が志向する目的の1つであると仮定して議論を進めよう^{注16)}。

上述したように、職業における関係性には、職業の「類似性」によるものと「相補性」によるものの2種類があった。ではまず、プロ競技者という職業の類似的関係における競技者の役割について、「勝利の追求」と絡めて考えてみたい。

プロ競技者という職業において、類似的な協力

関係はまずもって味方との間に成立するものであろう。彼らにとって競技上の味方は、チームスポーツであればチームメートということになるし、個人競技においてもコーチやトレーナーといったサポート・スタッフの存在があり、それらもまた広い意味でのチームメートとすることができるだろう。

こうした、チームメートとの関係において競技者が果たすべき役割は、抽象的に言うならば「協力関係による勝利の追求」ということになるだろう。その具体的な役割は当該種目におけるルールや、チームの戦術と競技者の技能との兼ね合いなどによって規定される。ある競技者に「ホームラン」、「ゴール」といった行為が求められるか、「送りバント」、「チェイシング」といった行為が求められるかは、上の要素によって規定されるので一概には言えない。求められる成功率も役割の違いによって様々であろう。サッカーのFWが「ゴール」を決めることに100%の成功率は求められないが、野球の外野手がフライを落球することは致命的なミスとなる。したがって、成功率という観点から役割の達成度は一概に評価できない。いずれにせよ彼らには、チームメートとの関係において決定される自身のポジション（役割）において勝利を目指しベストを尽くすことが求められるのである。

このような類似的な協力関係において各競技者がそれぞれの役割を果たすことにより、チームという単位での共同性が構成されることになる。

次に、プロ競技者における相補的な関係について考察しよう。上のような形で共同性を獲得したチームは、別のチーム、すなわち対戦相手との間に相補的な関係を結ぶことになる。以下では、その相補関係がどのようなものであるかを検討する。

Fraleigh (1984) はゲームにおける対戦相手同士の関係について、「障害物としての対戦相手」と「促進者としての対戦相手」の2つに分けて考察している。前者においては、対戦相手は「競争」や「卓越」という競技の目標にとって単なる障害物であり征服すべき対象である。よって対戦相手

同士の関係は排他的なものになる。一方、後者においては、対戦相手は「競争」や「卓越」を促進するための条件と考えられ、対戦相手同士の関係は協力的なものとなる。Fraleighによれば、倫理的には後者の関係が望ましいとされる。

そもそも、彼の言う「卓越 (excellence)」は、前者と後者において違った意味で用いられている。前者におけるそれは「量的卓越 (quantitative excellence)」と呼ばれ、対戦相手との比較（勝利）によって成立する相対的概念であるのに対し、後者におけるそれは「質的卓越 (qualitative excellence)」と呼ばれ、「十分にプレーされたか」という参加者や観客によって判断される美的な基準であり、単なる勝敗とは別次元のものである。したがって、前者と後者の見解の差異は、競技において単に勝つことを究極的な目的とするのか、それ以外の何かを目的とするのかという立場の違いによって生ずるものなのである。よって、勝利の追求を唯一の目的とする立場からすれば、対戦相手との関係は排他的なものになるであろう。

だが、この対戦相手同士の排他的関係は、あくまでゲームの勝敗を巡っての関係に限定される。そもそもゲームの勝敗というものは、ゲームが成立することを前提にした概念である。したがって、「ゲームを成立させる」という目的に対しては、対戦相手同士は協力関係を取り持たざるを得ない。プロスポーツにおいてはゲームこそがもっとも根本的な商品であるとされる。上述した Neale の「もし対戦相手がいなければジョー・ルイスは収入を得られない」(Neale, 1964, p.2) という命題は、プロ競技者にとって、ゲームを成立させることが職業の前提条件となっていることを示す好例である^{注17)}。すなわち、プロ競技者にとって対戦相手との関係性は、「勝利の追求」という目的にとっては排他的なものとして、「ゲームの成立」という目的にとっては協力的なものとして、二重の意味をもって立ち現れることになる。

そして、この両者の関係は必ずしも二項対立的なものではない。

(試合の) 参加者は、勝とうという試みの極

限を意図するだろう。というのも、まずそのことが十分にプレーされた試合を生み出すために必要不可欠であるし、またそのことが、副次的に、全ての試合もしくは大部分の試合に勝つような、ごく僅かな個人やチームを生み出すであろうから。それ故、十分にプレーされた試合という質的卓越と、唯一の傑出した個人もしくはチームという量的卓越の両方が、全ての参加者による相互的で積極的な努力から生じ得る (Fraleigh, 1984, p.89)。

競技者による勝利の追求は、自身の勝利だけではなく、質的卓越を伴ったより良いゲームの成立にも寄与し得る。このように、排他と協力という2つ関係における個々の競技者の役割は、二項対立的なものではなく、いわば弁証法的に統合化して成立するような、まさに相補的なものと捉えることができる。先程の議論に接続させるならば、対戦チーム同士はまさにこの相補関係によって1つの共同性を構成することになる。プロ野球やJリーグといったプロリーグを例に挙げるならば、個々のチームが他のチームとの相補関係により、「リーグ」という単位の共同性を構成する、といったことである。

3. 観戦者の魅了

ここでわれわれは、ここまでの議論に関して1つだけ疑義を呈さねばならない。例えば、先に挙げた敬遠の例が、プロ野球やメジャーリーグのゲームで行われたとしたら、恐らく観客から激しいブーイングを浴びるであろうし、そのような行為が繰り返されたとすれば、客離れに繋がる可能性も否定できないだろう。このことは、プロ競技者には単なる勝利の追求に止まらない、プラスアルファの役割が要求される可能性を示唆するものである。

Weiss (1969) は、まさにこうしたプロ競技者に求められる役割の特殊性について、以下のように述べている。

他の全ての職人と同様、プロは彼の工夫やコ

ントロールの外側にその本性と発展をもつ結果を生み出すために何らかの手段を用いて働く。大工は人々が座る椅子をつくる。人々がそれに座るかどうか、どのように座るか、は彼の関心事ではない。それとよく似た精神で、プロの競技者は、観客の中に喜びを、彼の雇主には利益を、なんとかして生み出さなければならない。結果は彼がスポーツを見事に遂行することによって生じると想定される。彼のスポーツは、他者の喜びと利益のための手段である。そして競合するプロの地位を継続できるかどうかを決定するものでないかぎり、そうした喜びや利益がどんなものであるか、またどう使われるのかは彼の関わる事柄ではない (Weiss, 1969)。

さらに Weiss は、こうしたプロ競技者の特殊性を、アマチュア競技者との対比において際立たせようとする。

反対に、アマチュアはより芸術家に近く、その時そこで、何か卓越したものを作り出すことに従事する。観客を楽しませること、また、ある組織を富ませることは意図されないし、望まれないし、あるいは、彼の競技への参加において必要とされる結果でもない。アマチュアにとってはゲームそれ自体が目的である (Weiss, 1969)。

要するに Weiss は、スポーツ実践において、純粹に卓越性を追求するのはアマチュア競技者だ、と述べているのだ。この主張をわれわれの議論に当てはめるならば、上で挙げた「ゲームの成立」と「勝利の追求」という2つの役割を果たすだけならば、プロとアマチュアの間に違いはないということになる。その上で、Weiss はプロに求められる特殊な役割として、「観客の中に喜びを作り出すこと」を挙げている。すなわち、プロ競技者のゲームにおける役割は、単なる勝利の追求に止まらず、「観客を楽しませること」が含まれるというのである。

プロ競技者の役割に関するこうした考え方は、

多くの実践者の言説の中にも共通して見られるものである。現役時代はサッカー・オランダ代表の伝説的プレーヤーとして知られ、引退後も監督として多くの実績を残したヨハン・クライフ（Hendrik Johannes Crujff, 1947—2016）の言を引こう。彼は、自身が理想とするプロサッカーのあり方について以下のように述べている。

私の考える理想のプロサッカーとは、まずプロであれば報酬を得るために結果を残すこと。もちろんこれは大切なことだ。しかしそれと同時に人々を魅了する美しいサッカーを目指すことも必要なんだ。どちらか片方では充分じゃない。両方とも同じくらい重要だからね（バーランド・ファン・ドープ, 1999）。

クライフの主張の要点は、サッカーにおける「勝利」と「美しさ」の両立である。もちろん、得点が0対0のような場面では、形にこだわらずゴールを決めることが優先される。その上で以下のようにつけ加える。

サッカーは美しく、かつ攻撃的でなければならない。それは一種のショーなんだ。たとえば4対0でリードして残り時間が10分。こんな時はシュートをゴールポストに当てて、観客を「おお」とどよめかせたほうが盛り上がるんだ。もう1点加えて5対0にしたって大した意味はないんだから（バーランド・ファン・ドープ, 1999）。

単に勝つだけでなく、美しいプレーを披露して観客を魅了すること。それこそクライフが求める理想のサッカーの姿なのである。

このように、Weiss やクライフはいずれも、プロ競技者に求められる役割として、勝利の追求と共に観客を楽しませることの重要性を指摘している。魅力的なプレーによって観客を楽しませること、すなわち「観戦者の魅了」こそ、「ゲームの成立」、「勝利の追求」に加えてプロ競技者が追求すべき、第3の役割なのである。そして、ここに

において競技者は観戦者との間に相補的な関係を結ぶことにより、より広い範囲の共同性を構成することになるのである^{注18)}。

4. 社会的価値の体现

最後に、職業としてのプロ競技者に求められる、より広い意味での社会的役割について言及したい。ここまでの議論において、われわれはプロ競技者の果たすべき役割を、ゲーム内のそれに限定してきた。だが、われわれは日々、様々なメディアを通じ、商品の宣伝、テレビ番組への出演、さらには様々な慈善活動を行うプロ競技者たちの姿を目にする。こうした例の1つをとっても、彼らがゲーム内に止まらない、より広い意味での社会的役割を担っていることが分かるだろう。

Smith (1973) は、現代社会において、いわゆるスポーツヒーロー（sport hero）が果たす役割の大きさについて言及している。そもそもヒーロー（hero）は、古来洋の東西を問わず、様々な神話や伝説の中で、強さ、高潔さ、勇敢さを併せもった類まれな人物として描かれてきた存在である。このような意味でのヒーローは、当該社会において、共通の価値観を維持し、規範を肯定し、人々の連帯に寄与するという重要な機能を担ってきたと言われる。そして、メディアが発達した現代社会においては、著名なアスリートたちがまさにこのような役割を果たすようになっている。彼らは、高度な身体能力、卓越した技能の継続性、チャンスで結果を残す勝負強さ、特別なカリスマ性などによって特徴づけられるが、一方でその時代を表すバロメーターとして機能し、社会的価値を体现する存在である。

橋本（2002）は、Smithと同様の観点から、それぞれの時代を代表するスポーツヒーローを事例として紹介しつつ、彼らが体现してきた社会的価値の変遷について考察している。その中で、近代の価値やイデオロギーを体现し、大衆に大きな影響を与えたスター選手としての「モダンスポーツヒーロー」、反対に、社会の支配的価値からの離反・離脱を促し、それに対する抵抗・反抗を体现する「アンチヒーロー」、「真面目」や「純粹」が重ん

じられる近代的な価値観に対し、「無頓着」や「遊び」によって特徴づけられる「ポストモダンヒーロー」という3つの類型を提示している。そして、時代や社会によって立ち現れるスポーツヒーロー像は絶えず変遷するが、それらは常にそれぞれの時代や社会を象徴する価値を体現し、人々の思い描くファンタジーを代理的に現実化してきたと述べている。すなわち、現代のスポーツヒーローは、「社会的価値の体現」という重要な役割を担う存在であるということである。

さて、現代においてこうしたスポーツヒーロー像を体現する存在は、そのほとんどがプロ競技者であるといつてよい。橋本は上で提示した3つの類型の代表的事例として、力道山、円谷幸吉、長嶋茂雄、ベーブ・ルース、ノーラン・ライアン（モダンスポーツヒーロー）、小錦、野茂英雄、モハメド・アリ（アンチヒーロー）、デニス・ロドマン、中田英寿（ポストモダンスポーツヒーロー）を取り上げているが、この中では、円谷を除いた全てがプロ競技者ということになる。かつて支配的だった強固なアマチュアリズムが退潮した現代のスポーツ界においては、高度な身体能力、卓越した技能、勝負強さなどの点において最も優れた競技者が、プロの世界に集中するのは自然なことである。したがって、現代社会において上述したスポーツヒーローの役割を担う存在が、多くの場合プロ競技者であることは、ある意味で当然のことだと言えよう。

上で述べた、プロ競技者が果たすより広い意味での社会的役割を抽象的に表現するならば、まさにこのスポーツヒーローとしての機能、すなわち「社会的価値の体現」ということになるだろう。こうした観点から、われわれは、「ゲームの成立」、「勝利の追求」、「観戦者の魅了」というゲーム内での役割に加え、「社会的価値の体現」というより広い意味での社会的役割を提示することができる^{注19)}。

そして、この社会的役割には、教育的効果という観点から非常に重要な位置づけを与えることができる。Smithは、スポーツヒーローの存在が、特に成長期の児童に大きな影響を与える点を指摘

している。成長するに従い、子どもたちはテレビや雑誌などを通じ様々なスポーツヒーローを知り、その一挙手一投足に関心を払う。こうした経験を通じ、子どもたちはスポーツに関心を傾け、スポーツの重要性や価値を学ぶことになる。内海（2004）も、同様の観点から、当該社会におけるヒーローとしてのプロ競技者の果たす役割の重要性について言及している。プロ競技者は、特に青少年に対し、高度な技術を通じて夢と希望と感動を与える存在である。内海はこれをプロスポーツの道徳的効果であると言い、プロスポーツの重要な存在意義の1つとして位置付けている。プロ競技者のヒーローとしての側面は、このように当該社会における重要な教育的価値をもっているのである^{注20)}。

さて、ここまでの議論から、プロ競技者は、いわば彼を中心とした同心円上の様々な他者との関係において役割を果たすことにより、それぞれの位相における共同性の構成に寄与すると考えることができる。プロ野球を例に挙げるならば、「チームメート」との類似関係においては、「協力的関係による勝利の追求」という役割を果たすことにより、チームレベルの共同性の構成に寄与する。次に、「対戦相手」との相補関係においては、「協力的関係によるゲームの成立」と「排他的関係による勝利の追求」という役割を果たすことにより、リーグレベルの共同性の構成に寄与する。ファンとの相補関係においては、「観戦者の魅了」という役割を果たすことにより、プロ野球界とファンとの間の共同性の構成に寄与する。そして、より広い意味での社会との相補関係においては、「社会的価値の体現」という役割を果たすことにより、野球というスポーツを超えた広範囲の社会的共同性の構成に寄与するのである^{注21)}。

さて、ここまでプロ競技者が果たすべき役割について考察を行ってきたが、「観戦者の魅了」や「社会的価値の体現」といった役割については、一定の技術水準や知名度が要求され、必ずしも全てのプロ競技者に課せられるものではないという反論も想定される。この点については、次の結語において議論することになる。

V 結 語

本稿では、プロフェッショナル競技者の概念内容を明らかにするために、尾高が提起した職業に対する3つの見地を主たる分析枠組みとして、様々な考察を行ってきた。

まず、経済的見地から JSCO の分類を参照し、スポーツに関わる他の職業との峻別によって、「競技又は試合に参加し、運動競技を行うもの」という職業としてのプロ競技者の定義を明確にした。また、収入形態や資格の付与といった観点から、プロ競技者の中に様々な形態があり得る可能性を示した。

次に、技術的見地から考察を行い、武谷や佐藤の議論をベースに、「客観的法則性としてのスポーツ構造に意識的に則り競技者が自身の技能を発揮すること」という競技者の技術的特性を明らかにした。また、野中らの組織論を参照し、プロ競技者そのものを特徴づける技術の在り様として、確固とした組織体制を前提に、彼らが依拠するスポーツ構造の変容が起こり得る可能性を指摘した。

最後に、倫理的見地から、プロ競技者が果たすべき「役割」がいかなるものであるのかを考察した。その結果、「チームメート」との類似関係においては「協力的関係による勝利の追求」が、「対戦相手」との相補関係においては「協力的関係によるゲームの成立」と「排他的関係による勝利の追求」が、観客との相補関係においては「観戦者の魅了」が、より広い意味での社会との相補関係においては「社会的価値の体現」が、プロ競技者

の果たすべき役割であると結論づけた。

さて、これらの考察においてそれぞれの結論は留保されていた。すなわち、経済的見地においては、全てのプロ競技者が「生計のための一定の金銭収入の確保」という要件を満たしている訳ではないこと。技術的見地においては、イノベーションの創出という技術水準は、トップレベルに限られたプロ競技者にのみ当てはまるのではないかと。倫理的見地においては、「観戦者の魅了」や「社会的価値の体現」といった役割が、一定の技術水準や知名度をもつ一部のプロ競技者にのみ与えられるものではないかということである。

こうした疑問に回答するために、われわれはプロ競技者における「専門性」の契機に着目する必要がある。本稿緒言において述べた通り、プロ競技者の概念には「長期にわたる訓練、公式の資格を要するもの」といった「専門性」の契機が見て取れた。こうした専門性は、一定の閾値を境にその有無を判断できるようなものでは必ずしもないだろう。長期にわたる訓練は、その積み重ねより競技者の技術水準を高めていき、引いては彼の経済的成功や社会的影響力の増大にも寄与し得る。すなわち、一口に専門性といっても様々な水準があるのであり、その水準に応じてプロ競技者の在り様にも違いが生じるのである。

このような専門性の水準を、ここでは「専門性レベル」と呼ぶことにする。図2は、専門性レベルの高低に応じて職業性の3要素にどのような違いが表れるかを示したものである。経済的水準においては、資格のみで無収入の状態から、専門性レベルが高度になるに連れ、次第に収入が増し、その最高度においてはエンドースメント契約によ

専門性	経済	技術	倫理
高	高額収入	イノベーション	社会的価値の体現
	↑	↑	↑
	生計の維持		観戦者の魅了
	↑		↑
低	資格のみ	スポーツ構造に意識的に則った技能の発揮	勝利の追求 ゲームの成立

図2 専門性レベルに応じた3要素の変化

る大きな経済的成功が実現される。技術的水準においては、単にスポーツ構造に意識的に則り技能を発揮しているレベルから、イノベーションによるスポーツ構造の変容を可能にするレベルまで、競技者によって様々な状況が想定される。倫理的な役割の水準においては、専門性レベルに応じて、「ゲームの成立」や「勝利の追求」に止まらず、「観戦者の魅了」や「社会的価値の体现」といったより高度の役割が期待されるのである。

プロ競技者概念の外延は、専門性が高くなるに連れ競技者の数が少なくなるという、いわばピラミッド構造をもっている。われわれがメディアを通じて目にするトッププロの活躍の背後には、より知名度の低い大多数のプロ競技者の存在がある。現代スポーツの中で不可欠な存在となったプロスポーツの発展のためには、こうしたプロ競技者の裾野を広げ文化としての厚みを増すことが重要となるだろう。

さて、最後に本稿の議論の限界と今後の展望について、プロスポーツを巡る歴史的背景に言及しつつ述べておく。周知の通り、19世紀イギリスにおける近代スポーツの誕生以降、スポーツにおけるプロフェッショナルはアマチュアとの対比において語られてきた。両者は身分的観点において区別され、「ジェントルマン」であった貴族や新興ブルジョワジーたちは、自らを真のスポーツの担い手としての「アマチュア」と規定し、競技によって金銭を得る人々をプロフェッショナルと称し蔑んだ。

その後、時代を下るにつれて身分的な意味は希薄になっていくが、20世紀以降も、プロフェッショナルをスポーツから排除しようとするアマチュア至上主義はスポーツ界に根強く残り続け、IOCや各スポーツの国際競技連盟、各国のスポーツ競技団体は長きにわたり、アマチュアであることを主催競技会の参加要件としていた。

結果として、サッカーや野球などプロ化が一早く進んだ一部の競技を除いて、スポーツ界においては、長らくアマチュアがその競技におけるトップレベルを担ってきた歴史がある。すなわち、その時代においては、例えば、他の職業領域—医療

や法務など—においては当然プロフェッショナルに要求されるような特性をアマチュアが担ってきたと考えることができる。

時代が下り、大多数の競技種目においてプロ化が進んだ現代においても、アマチュアはスポーツ文化の中で大きな領域を占める存在である。本稿の議論に引き付けるならば、特に競技者の技術的・倫理的側面については、一定のレベルにおいてはアマチュアもプロと同様の特性を有していると考えられることもできよう。

医師や弁護士といった他の専門職においては、そもそもアマチュアという存在自体がナンセンスであり、音楽や演劇といった他の文化領域においてすら、これ程までにアマチュアが一時にはプロフェッショナル以上に一大きな存在として影響力を持つということはないだろう。こうしたことに鑑みても、上述の問題は、歴史的背景が故に生じた、他の職業界と異なるプロスポーツの特殊性と捉えることができるかも知れない。

本稿では、現代社会におけるプロ競技者の在り様を見つめる共時的な考察に重点を置いてきたが、こうしたプロスポーツの特殊性について十全な議論を尽くすためには、アマチュアリズムの時代から現代に至る歴史を検証する通時的な考察が必要になるだろう。この課題については機会を改めて取り組みたいと考える。

注

注1) 以下、文献表に和訳本の記載のないものについては、外国語文献の引用は筆者の翻訳によるものである。

注2) 以下、引用文の旧字体は全て新字体に改めた。

注3) これは、彼の職業論が当時支配的であったマルクス主義が批判する「疎外された労働」の概念よりも、むしろマックス・ウェーバーが提示した、それに対する禁欲的な専心が真の個性の獲得に繋がるという「仕事(Sache)」の概念に依拠したことにも関係していると思われる。この点については尾高(1995)を参照されたい。

注4) ここで言うエンドースメント(endorsement)とは、企業がネームバリューのある競技者やアーティストなどの「エンドーサー(endorser)」と結ぶ肖像権利用や商品化権の独占契約のことである。なお、これ以外にも、人気のある競技者であれば、テレビ番組への出演

料といった副業収入を得ることができる。

注 5) 各資格及び登録方法の詳細は、日本ボクシングコミッション (online)、日本プロゴルフ協会 (online)、日本テニス協会 (online) を参照。

注 6) 両契約の詳細は、日本サッカー協会 (2017) および日本プロ野球選手会 (online) を参照。

注 7) その他、陸上、水泳、体操、卓球などの一部の個人種目においては、企業に所属する競技者が、「プロ宣言」をしてスポンサーと個人契約を結び収入を得る、という形で「プロ転向」する場合がある。

注 8) この点をカテゴリー論によって説明するならば、技能は実体概念、技術は関係概念ということになるだろう。カテゴリー論における実体概念と関係概念については、佐藤 (1993) を参照されたい。

注 9) 自然法則とスポーツ構造を同様に捉えることに疑義が生じるかも知れない。例えば、スポーツ構造が自然法則と同じであるとすれば、法則であるにもかかわらず変容するというようになってしまう、といったものである。ただ、佐藤の文意はあくまで類比的に捉えるということであって、同一視するものではない。重要なのは、現象の背後に体系的な構造が存在するという観点である。

注 10) Adolfo Alfredo Pedernera (1918—1995). 1930—50年代にかけ、アルゼンチンの名門クラブ、リーベル・プレートなどに所属し活躍した。

注 11) Hidegkuti Nándor (1922—2002). 1950年代前半の欧州で隆盛を誇り「マジック・マジヤール」と呼ばれたハンガリー代表の中心メンバー。

注 12) Alfredo Stefano Di Stéfano Lauthe (1926—2014). 1950年代後半に UEFA チャンピオンズカップ 5 連覇を達成したスペインの名門レアル・マドリードのエースとして活躍した。

注 13) Michael Laudrup (1964—). 1980年代から1990年代にかけ、デンマーク代表やイタリアの名門ユヴェントス、FC バルセロナ、レアル・マドリードなどで活躍。

注 14) Francesco Totti (1976—). 1990年代よりイタリアの名門クラブ AS ローマの中心選手として活躍。元イタリア代表。

注 15) Franck Henry Pierre Ribéry (1983—). 2000年代よりフランス代表 FW として活躍。2017年現在、所属はバイエルン・ミュンヘン。

注 16) 事実、多くのプロスポーツ団体が定める規約等において、勝利の追求が重視され不正行為が厳しく禁じられている。一例として、「日本プロフェッショナル野球協約 2016」177条および、「Jリーグ規約」42条および 43条を参照 (日本プロ野球選手会, 2016 および日本プロサッカーリーグ, online)。なお、こうした規定には倫理的意義のみならず、八百長行為の防止という実利的な意義がある。1969年に発覚したプロ野球における一連の八百長事件、いわゆる「黒い霧事

件」では、多くの関係者が上述の条項にもとづき永久追放などの厳重な処分を受けている。

注 17) Joseph “Joe” Louis Barrow (1914—1981). 1930—40年代に活躍したアメリカの元ボクシング世界ヘビー級王者。

注 18) 「観戦者の魅了」がプロ競技者に求められる役割の 1 つである、という主張に対しては、あくまで一時的・一過性のものではないか、という指摘があるかもしれない。これについては、アマチュアボクシングとプロボクシングの違いを例に反論できる。ボクシングでは、足を使って相手の攻撃をいなしつつ、威力はさほど無い小さいパンチを多く当てて判定勝利に持ち込む、いわゆる「足で稼ぐ」戦法がある。こうした戦法は、アマチュアボクシングでは多くみられ、これによりオリンピックで金メダルを獲得する選手も多くいる。しかしながら、この戦法はプロの試合では観客の支持を得られず、しばしばブーイングの対象となる。プロの試合では、観客はノックダウンの頻発する派手な展開を求める傾向がある。そのため、足で稼ぐで勝利を重ねる選手よりも、負けは多くともノックアウト狙いの派手な選手の方が人気を博し、はるかに高額のファイトマネーを手にすることは珍しくない。そのため、オリンピックの金メダリストであっても、プロ転向後にファイトスタイルを変更する事例は珍しくない。本稿結論部の議論に繋げるならば、一定以上の専門性レベルを獲得するためには、このような意味での「観戦者の魅了」という役割は不可欠のものと言えるだろう。

注 19) 当然のことながら、競技者がもつ社会的影響力には負の側面もあることを忘れてはならない。それは、スポーツがナショナリズムと結びつき、国威発揚の道具として利用された歴史を振り返れば明らかなことである。

注 20) なお、こうした道徳的効果の対象は青少年に限ったものではない。例えば、Kim and Walker (2013) は、プロ競技者によるフィランソロピーが、人々の寄付行為を促進する可能性を指摘している。

注 21) ここで、これまでわれわれが述べてきたプロ競技者が関わる「共同性」の概念について一点補足しておく。MacIver (1920) の言う community/association の二項図式に則るならば、その共同性とは、後者すなわち「複数の共通した諸関心の追求のために明確に設立された社会生活の組織体」としての association を構成する性格のものであろう。したがって、それはプロ競技者の不正や反社会的な行為によって瓦解しかねない脆弱性を持ったものであり、だからこそプロ競技者には高度な倫理性が社会的に問われることになるだろう。

文 献

バーランド・ファンダーブ：金子達仁監訳 (1999) ヨハン・クライフ「美しく勝利せよ」。二見書房, pp.88-

89. <Barend, F. and van Dorp, H. (1999) Ajax, Barcelona, Cruyff. Bloomsbury Publishing.>
- Career Garden. プロボクサーの仕事。プロボクサーの給料・年収・収入・ファイトマネー。http://careergarden.jp/boxer/salary/, (参照日 2017 年 10 月 6 日)。
- Forbes (2017) The world's highest-paid athletes. https://www.forbes.com/athletes/list/#tab:overall, (accessed 2017-06-19).
- Fraleigh, W. P. (1984) Right action in sport: Ethics for contestants. *Human Kinetics*, pp.83-92. <フレイリー：近藤良享ほか訳 (1989) スポーツモラル。不昧堂出版, pp.105-115.>
- Gerth, H. and Mills, C. W. (1954) Character and social structure: The psychology of social institutions. Routledge & Kegan Paul.
- 橋本純一 (2002) メディアスポーツヒーローの誕生と変容。橋本純一編, 現代メディアスポーツ論。世界思想社, pp.245-272.
- 石村善助 (1969) 現代のプロフェッション。至誠堂。
- 川井圭司 (2003) プロスポーツ選手の法的地位。成文堂。
- 川谷茂樹 (2005) スポーツ倫理学講義。ナカニシヤ出版。
- 菊幸一 (1993) 「近代プロ・スポーツ」の歴史社会学：日本プロ野球の成立を中心に。不昧堂出版。
- Kim, M. and Walker, M. (2013) The influence of professional athlete philanthropy on donation intentions. *European sport management quarterly*, 13(5): 579-601.
- MacIver, R. M. (1920) Community: A sociological study: Being an attempt to set out the nature and fundamental laws of social life (2nd ed.). Macmillan, p.24. <マッキーヴァー：中久郎ほか訳 (1975) コミュニティ：社会学的研究：社会生活の性質と基本法則に関する一試論。ミネルヴァ書房, p.47.>
- Millerson, G. (1964) The qualifying associations: A study in professionalization. Routledge & Kegan Paul.
- 中野秀一郎 (1981) プロフェッションの社会学。木鐸社。
- Neale, W. C. (1964) The peculiar economics of professional sports. *The quarterly journal of economics*, 78(1): 1-14.
- 日本ボクシングコミッション。プロボクサー新人テスト受験要項。https://www.jbc.or.jp/info/test.html, (参照日 2017 年 6 月 19 日)。
- 日本プロゴルフ協会。資格情報：「資格認定」プロテストとは。http://pga.or.jp/pro-test/sankou.html, (参照日 2017 年 6 月 19 日)。
- 日本プロサッカーリーグ。Jリーグ規約。http://www.jleague.jp/docs/aboutj/regulation/02.pdf, (参照日 2017 年 6 月 19 日)。
- 日本プロ野球選手会。統一契約書書式。http://jpbpa.net/up_pdf/1284364576-534836.pdf, (参照日 2017 年 6 月 19 日)。
- 日本プロ野球選手会(2016)日本プロフェッショナル野球規約 2016。http://jpbpa.net/up_pdf/1471951971-129176.pdf, (参照日 2017 年 6 月 19 日)。
- 日本サッカー協会 (2017) プロサッカー選手の契約, 登録および移籍に関する規則。http://www.jfa.jp/documents/pdf/basic/br20.pdf, (参照日 2017 年 6 月 19 日)。
- 日本テニス協会。公益財団法人日本テニス協会プロフェッショナル登録基準。http://www.jta-tennis.or.jp/Portals/0/resources/JTA/pdf/information/registration/pro_touroku_std.pdf, (参照日 2017 年 6 月 19 日)。
- 野中郁次郎・竹内弘高：梅本勝博訳 (1996) 知識創造企業。東洋経済新報社。
- 尾高邦雄 (1953) 新稿 職業社会学 第一分冊。福村書店。
- 尾高邦雄 (1995) 仕事への奉仕 (尾高邦男選集 2)。夢窓庵, pp.144-188。
- パラルナウ：羽中田昌ほか訳 (2015) バップ・ゲアルディオラ：キミにすべてを語ろう。東邦出版。<Perarnau, M. (2014) Herr Pep. Roca.>
- Polanyi, M. (1958) Personal knowledge: Towards a post-critical philosophy. Routledge & Kegan Paul. <ポラニー：長尾史郎訳 (1985) 個人的知識：脱批判哲学をめざして。地方・小出版流通センター.>
- Polanyi, M. (1966) The tacit dimension. The University of Chicago Press. <ポラニー：高橋勇夫訳 (2003) 暗黙知の次元。筑摩書房.>
- 佐藤臣彦 (1992) 体育とスポーツの概念的区分に関するカテゴリー論的考察。体育原理研究 22：1-12。
- 佐藤臣彦 (1993) 身体教育を哲学する：体育哲学序説。北樹出版, pp.89-95。
- Smith, G. (1973) The sport hero: An endangered species. *Quest*, 19: 59-70。
- Soanes, C. and Stevenson, A. (eds.) (2003) Oxford dictionary of English (2nd ed.). Oxford University Press, p.1405。
- 総務省 (2009) 統計基準：日本標準職業分類。統計情報研究開発センター。
- 武谷三男 (1968) 弁証法の諸問題 (武谷三男著作集 1)。勁草書房。
- 竹内洋 (1971) 専門職の社会学：専門職の概念。ソシオロジ, 16(3)：45-66。
- 内海和雄 (2004) プロ・スポーツ論：スポーツ文化の開拓者。創文企画。
- Weiss, P. (1969) Sport: A philosophic inquiry (Arcturus Books ed.). Southern Illinois University Press, pp.202-203. <ワイズ：片岡暁夫訳 (1985) スポーツとはなにか。不昧堂出版, p.220.>

(2017 年 7 月 7 日受付)
(2018 年 4 月 10 日受理)